「邯鄲の初夢」

　　　　元日はまだ春霞たちこめて二日に見せをあけぼのの空

　と江戸の狂歌にいいますが、元旦は空に霞がとろんとかかって朦朧としたまま。その霞は二日になってやっと晴れるのですが、年末の慌ただしい中を超特急で一時帰国をし、京都にいってまいりました。

　関西の学校で超特急講義をし、日頃考えている欧州連合のあれこれ、国際法学のあれこれ、国際機関のあれこれ、そして極め付きに「国際機関の仕事は面白いですよ」と若い人たちを啓蒙し（あるいはたぶらかし）てまいったのでありますが、その講義におけるわたくしの本音はこういうことであります。

「邯鄲（かんたん）の夢」という故事がありますね。ある若者が道者を訪ねて邯鄲という街へいく。ちょうど時分どきだったので道者はお粥の支度をしてくれる。粥が煮えるまで昼寝でもしていなさいと言われ、若者は横になるのです。昼寝のあいだ、彼は夢を見る。その夢で若者は公務員上級試験に合格し、お金持ちの娘と結婚し、トントンと出世をして事務次官になり、そのあと天下りしてあちこちの公団の総裁を務め、それぞれに退職金をしこたまいただいて、おおあくびをしたところで目が覚めるのです。が、目をさました時、お粥はまだ煮えていなかったという中国の故事であります。

　わたくし自身はいまや『剣客商売』の秋山小兵衛ほどの隠居人で、現役のときにも故事における若者ほどには栄華を極めずにやってまいりましたが、顧みると国際機関の３０年は、それこそお粥が煮えないほどに、光陰矢の如し、短くも楽しい経験でありました。で、その楽しい経験をいかように次世代に伝えるか、どのように彼らに「国際公務員ておもしろそうじゃん」と興味を持たせることができるか、そのあたりが話に隠したテーマだったのでありましたが、受講生のなかで寝ていたのは一人だけ。わたくしの話術としては好成績だったと思いたい。

　クラスにはアジアの国からの留学生が幾人かおりましたが、彼らからも「では、どうやって国際機関へ入れるのですか。入った後、どういうおもしろいことが待っているのですか」と真剣な質問が続いて、わたくしの目的は果たせたようでありました。

「どうやって国際機関へ入れるのですか」については、我が国には外務省に「国際機関人事センター」という部署があって、国際機関で働きたいという若い人（若くなくてもいいけど）の支援をしてくださっております（成果は問わないけど……）。だが、アジアの多くの国々にはそのような便宜はない。志を持つ学生たちは自力で自分たちをプッシュしていかなくてはならないようです。その意味でも彼らの競争力は、彼らが生身で挑戦している分、邦人学生さんたちよりもより真剣であるように思えました。

　さて、国際機関に入ると「どういうおもしろいことが待っているのか」

　この質問はときに真剣な問いである反面、ときにからかい気味なおちょくり質問であります。国際機関と言ったって昨今はろくな成果を出していないだろう、どこがおもしろいというのですか・・・。

　その空気を察しながら、わたくしはこれまでそれは「多文化のひとびとと仕事をする興味・おもしろさ」だよと言ってきておりました。国際機関はまさに人種の坩堝（るつぼ）なのでありまして、わたくしの周辺をちょっと見回してみても、イスラム信者がいて、ヒンズー教徒がいて、キリスト教徒がいて、無宗教でニヒリストがいて、ヴェジタリアンがいて、ゲイ、レズビアンがいる……。こちこちの共産主義者だって、少数ではあるが、いまでも生き残っております。マルチナショナルな企業でもこれほどまでに多面的な人種の混合はないでしょう。彼らとのつきあいは文化史的・社会学的・人類学的に豊穣な経験であります。

　早い話が、我が家では女房が同僚にディナーやランチに呼ばれると、かならずメニューのレシピを聞き書きしてくるのですが、こうして我が家にはラルースの辞典もかくやというくらいに世界各地の料理の処方箋が揃っている。中華、イタリア、フレンチ、スパニッシュはもちろん、インド、トルコ、ハンガリー、エチオピア、すべてが彼らの家庭で構築可能な献立であり、拙宅でも再生可能な料理であります。

　だから文化的に豊穣な経験ができるのでありますが、それ以上に有益な経験として、プロフェッショナルなロールモデルに出会えることがあるのです。

　数年前にイラクで非業の死を遂げたセルジオ・デメロ氏、ＰＫＯや中東での国連バッファーに実務的な功績を残したブライアン・アークハート氏、このコラムでも書いたことのある女性初の事務次長補になったマーガレット・アンスティーン氏などはみんな、わたくしたちが影響を受けた国際公務員の先達でありましたが、昨年、書こうと思っていて書き忘れていたフィンランドのマルティ・アハティサーリ氏（２００８年のノーベル平和賞の受賞者です）もそういうプロフェッショナルなひとりであった。

　アハティサーリ氏については、なぜこれまでこの平和賞の対象にならなかったのか不思議でさえあって、１９８０年代に国連に籍を置いていたものは、だれしもアハティサーリ氏と仕事をする機会を得、影響を受けた。彼の受賞がニュースになった時、多くのメディアは彼が国連事務総長特使として、さらに欧州連合代表として、コソボ問題に取り組んだことや、インドネシア政府と同国アチェの独立運動との仲介をしたことを評価していたが、わたくしたちの世代にとってアハティサーリ氏というのはUnited Nations Transition Assistance Group UNTAG を成功させたリーダーであり、同志だったのであります。

　アハティサーリ氏はもともと外交官である。３６歳でフィンランドのタンザニア大使になったが、北欧の国々には、外務省のサイズが英米仏などの大国と違うこともありましょうが、若くして大使を務める人材がごろごろおります。

　脱線しますと、この頃のアフリカではアメリカと中国が権益を争っていて、その援助攻勢によってタンザニアにタンザン鉄道がつくられたのですが、米中それぞれが異なる規格で線路を持ち込んだから、この鉄道路線はすぐには使い物にならなくなってしまった。その時期にアフリカの大使を務めたということは、米ソ・米中の権益を相手に外交をしたということで、ずいぶん外交力を鍛えられたに違いない。

　アハティサーリ氏はそのアフリカの経験をもとに国連事務総長アフリカ特別代表を務めるのですが、そのあいだに事務局では行政担当の事務次長にもなって事務局の司法改革（これにはわたくしも関与した）なんぞも行う。つまり、極めて想像力にとんだ官僚でありました。

　ナミビアの選挙管理と独立支援は、国連が総力を挙げておこなったメガヒット級の事業であります。第一次大戦時に南アフリカはドイツ支配下の南西アフリカを占拠していたが、戦後、国際連盟の委任統治令によってこの地域（いまのナミビア）を統治下に組み込むのです。だが、第二次大戦のあと、国連が連盟を継承して南西アフリカを信託統治下におこうとしたとき、南アフリカはこれを拒否するのです。そして事実上、南西アフリカを植民地化してしまった。

　一方、南西アフリカ内部では南アフリカからの独立の機運が芽生え、South-West Africa's People's Organisation SWAPO というゲリラ組織がつくられる（ダラー・ブラントという南ア系のジャズ・ピアニストがおりますが、彼がこの時期、SWAPO をテーマにしたレジスタンスのジャズ・アルバムを出し、これが大きなヒットとなって、不況だった当時のニューヨークのジャズ界に喝を入れたことがあった。このレコードのおかげで南アの出来事はメディアの関心ともなったのであります）。

　キューバ、アンゴラ、ポルトガルなどこの地に権益をもつ外国がからんで、アフリカ南部はさらに混乱に陥るのですが、１９７６年になって安全保障理事会は腰を上げ、議論の末、２年後の１９７８年に「国連の監視下のもとに南西アフリカ人民の民意を問う選挙を行う」という決議を出すのであります（決議３８５）。

　だがなにもおこらないまま、１０年が過ぎるのです。外交というのはタイミングでもあり、チャンスを捉えるのも外交の技量であるが、１９８８年になってキューバ、アンゴラがちょっと軟化したときをとらえ、国際社会はアメリカ国務省の仲介を軸に、紛争解決交渉に動く。

　こうして１９８８年にもうひとつ安保理決議（４３５）が通り、ナミビア人民に「南アフリカからの独立か、はたまた南アフリカへの従属か」を問う選挙が国連の監視の下に行われることになったのであります。このミッションが UNTAG であり、その責任者がアハティサーリ氏だったのであります。

　UNTAG は極めて野心的な事業であった。軍事・警察部門は加盟国からの軍事支援によるが、選挙管理は国連職員が駆り出されておこなわれた。事務局のほぼ３分の１がナミビア・ミッションに参加することになって、本部はほとんど空っぽになり、留守番をする居残り職員（わたくしもそのひとりだったが）の負担は相当なものとなったが、だれも文句を言うことなく（そういうことは国際機関では珍しい）、ミッションにでた同僚の仕事をカバーしたのであります。職員が一丸となってこれほどまでに情熱的にミッションをサポートしたのは、国連史の中でもほとんど例のない稀なケースではなかったか。

　はじめての大規模な選挙支援だったから、さまざまな問題がおこりました。ロジの点では、ジープをヨーロッパから持ち込んだのだけれど、欧州製のタイアはアフリカのハイウェイにマッチしておらず、飛び出してきた動物を避けきれずジープがおおきくスキッドして乗員が死亡するという事件もあった。

　買収とか恐喝とか集計のごまかしとか、選挙になると起こりうる不祥事も予想・懸念されたが、アハティサーリ氏の政党・政治グループとの根回しによって、違反は驚くほど少なかったのでした。９７パーセントが有効票で、無効となったのはたったの１パーセントだったのですが、最近のアフリカ大陸における選挙のほとんどが血まみれの暴力騒ぎになるのをみると、ナミビアの選挙はどこの大陸の話だったのだろうと思ってしまう。

　１９８０年代のわたくしたちはこのように情熱的に仕事をしていたのですが、学生諸君が世界においてなにがしかの大きな仕事、あるいは意味のある仕事を成し遂げようと思うとき、アハティサーリ氏のような人物に出会うことは重要であります。そして、国際機関にいるとこういう人物に出会う機会がほかのＮＧＯやＮＰＯやアカデミアにいるよりも比較的多いのだ、とわたくしは思うのであります。

　さて。

　京都を去る前、わたくしは四条河原町の宝くじ売り場で、いちばんふくよかな笑顔のおばさんから年末ジャンボ宝くじを買いました。籤はいまいましくもはずれでしたが、でもおばさんのあのふくよかな笑顔は、２億円に値する笑い顔だったなあ。

　戻って見ると、大晦日、ヨーロッパの各都市で花火がおおきくあがっておりました。オランダも国中で花火をあげる。花火の打ち上げは午後の四時頃からはじめてよいことになっているので、拙宅の近所の子供たちも昼から爆竹を鳴らしてまわっており、村中が硝煙の匂いで充満している。テレビを観ても、パリでもロンドンでもシドニーでも大きな花火が綺麗にあがっておりました。その反面、わたくしたちイスラエルによるガザ地域のミサイル攻撃の爆音を聞き、アフガニスタンとパキスタン国境の銃声を同じ音量で聞いた。そんな年明けですが、今年はあのおばさんの笑顔を思い出しながら、にこにこしながら日々を過ごしていきたい、そんなところがわたくしの初夢であります。